『エジプト人マカリオス伝』をめぐる諸考察

——歴史と文学伝承の関係——

A History Seen from a Literary Work,
and Vice Versa: Some Reflections on the
*Life of Saint Macarius the Egyptian*戸田 聡^{*}
TODA Satoshi

ABSTRACT One of the most prominent monks of the fourth century, Macarius the Egyptian has been treated in various ways by the literary tradition of the Christian Orient. Homilies attributed to him, although they have been proved to be unauthentic, are among the most read of spiritual texts; apophthegmata related to him are well known; and all these works have been transmitted in several languages of the region, as is also the case with his *Life*, the subject of my doctoral dissertation. One might expect that we know much about this famous figure.

However, it is far from certain that various anecdotes, such as those included in the *Life*, show us the historical figure of Macarius. What do we know about the real Macarius? The first half of the article discusses this problem, and it appears that the historical figure of Macarius is shrouded in legends. As for the *Life*, since it stands at the end of the tradition concerning Macarius, though it seems out of the question that it has value as a source for the historical Macarius, it is better to consider the *Life* as a source for the image people of later generations had about Macarius, and of course this in itself is not without interest.

A different approach is adopted in the second half of the article, in which history is seen from the transmission of the *Life*. It is shown that in the process of transmission, the *Life* touched various interesting literary movements, such as a large-scale translation project into Bohairic from either Greek or Sahidic, hitherto almost unknown activity involving translation from Bohairic into Syriac, the probable encounter of Arabic text(s)

* オランダ・ライデン大学文学部博士課程
Ph. D. Student, Leiden University

with the Byzantine literary movement of metaphrasis, etc.

It is the author's conviction that these two approaches are complementary and necessary when one deals with problems related to early monasticism in Egypt.

初期修道制或いは東方キリスト教に興味を抱く者にとって、エジプト人マカリオスの名は最も親しいものの一つであると言えよう。まずマカリオスは、古代末期において峻厳な修道生活を以て聞こえたスケーティスの砂漠（現在のワーディー・ナトルーン）における修道制を創始した人物であり、その反映として、初期修道制研究上の最重要文献の一つである『師父たちの金言』（以下『金言』）において、マカリオスに帰せられる金言は、アントニオス、アルセニオスらに帰せられる金言と並び最も数の多いものの一つである。また、今日真筆性を否定されているが、写本伝承上マカリオスに帰せられてきた一群の講話は、著作原語のギリシア語だけでなく、早くに成立したシリア語託など諸言語で広範な読者を得たようであり、マカリオスに帰せられる書簡群も同様な伝承上の広がりを示す。筆者の学位論文（準備中）の題材であり、コプト語（サヒド及びボハイル方言）・シリア語・アラビア語・エチオピア語・ギリシア語等で伝わる『エジプト人マカリオス伝』も、彼の高名の証しの一つと言えよう。⁽¹⁾

しかし、マカリオスにかかわる文書が多く伝存することは、彼の生きざまを我々がよく知ることができることを必ずしも意味しない。『マカリオス伝』から、我々は彼について何を知りうるのか。本稿の前半では、『マカリオス伝』の種々のエピソードを、出所たる諸文書への遡及を交えて検討し、マカリオスの史的人物像に迫りたい。

本稿の後半が問題とするのは、やや異なった角度から見た歴史と文学伝承の関係である。すなわち、『マカリオス伝』に関する文献学的検討を通じて、その伝承が、さまざまな場所での文学上の動きにかかわっていることが明らかになってきた。本稿の後半では、文学伝承・写本伝承を通して見えてくる歴史を論じてみたい。

行論の都合上、『マカリオス伝』の諸語版の関係についてここで一言すると、⁽²⁾写本系統図（図1）が示している翻訳（サヒド方言版→ボハイル方言版→シリア語版→アラビア語版）或いは書き直し（アラビア語版→ギリシア語版）とい

図1 『マカリオス伝』 写本伝承の系統図

った点は既に別稿で一応論じたので、以下ではこれを前提とする。なお、サヒド方言版は断片的にのみ現存し、テキストが完備した形で再構成できる最古の版はボハイル方言版であることに注意を促しておきたい。

表1 『マカリオス伝』諸版の内容の比較

	VMCopt (Boh)	VMSyr	VMArab		VMGr
			ArabX	ArabY	
			ArabA, B & C	ArabD	
Prol. -XXXV	○	○	○	Pt	○
XXXVI	M	○	M	M	○
XXXVII	M	○	M	M	○
XXXVIII	M	○	M	M	○
XXXIX	M	○	M	M	○
XL	M	○	○	○	○
XLI	M	○	M	M	○
XLII	M	○	M	M	○
XLIII	M	○	M	M	○
XLIV	M	○	M	M	○
XLV	M	○	○	○	○
XLVI	M	○	○	○	○
XLVII	M	○	○	○	○
XLVIII	M	○	○	Pt	○
XLIX	M	○	○	○	○
L	M	○	○	Pt	○
LI	M	○	○	○	○
LII	M	○	M	M	○
LIII	M	○	○	○	○
LIV	XXXVI	○	Pt	Pt	○
LV	XXXVII	○	Pt	Pt	○
LVI	M	○	Pt	Pt	○
LVII	XXXVIII	○	○	○	○
LVIII	XXXIX	○	○	○	○
LIX	XL	○	○	Pt	○
LX	M	○	○	○	○
LXI	M	○	○	○	○
LXII	XLI	○	Pt	Pt	○
LXIII	XLII	○	Pt	Pt	○
LXIV	XLIII	○	M	M	○
LXV (Epilogue)	XLIV	○	M	M	○
LXVI	M	○	○	○	○

○=当該章が伝存していることを示す

Pt=当該章が部分的に伝存していることを示す

M=当該章が欠落していることを示す

I. マカリオスの史的人物像

マカリオスをめぐる最古の記録はヒエロニュムの第22書簡の中にあるようである（訳文中（ ）内は戸田による補足。その他の訳出でも同様）。

「或る兄弟が、貪欲というよりはむしろ儉約家で、また、主が銀30枚で売られたことを知らないため、亜麻布を織って得ようとし（実際に手に入れ）た100ソリドゥスを、死ぬ時に後に残しました。修道者たちの間で——というのも、同じ場所に約5千人が、別々の僧房に住んでいたもので——、どうすべきかについて話し合いがもたれ、貧しい人々に配布すべきだと言う者たちもあれば、教会に寄付すべきだと言う者たちもあり、両親に返すべきだと言う者たちもありました。しかし、マカリオス、パンボ、イシドロス、その他「父たち」と呼ばれている人々は、——聖霊が彼らの中で語って——『お前の金はお前とともに滅びるがよい』（使徒8・20）⁽⁴⁾と言って、それを持ち主ともども埋葬すべきだと決定したのです」。

文中のマカリオスは、或いは「エジプト人」とは別のマカリオスかもしれない⁽⁵⁾。ただ、金銭を愛する弟子とエジプト人マカリオスの関係を描いた逸話が『マカリオス伝』を含む後代の伝承にあること、また、マカリオスが権威ある者として言及されているところなどから見て、文中のマカリオスはエジプト人マカリオスだと考えられる。この推測が正しければ、ヒエロニュムの記述は、390年に90歳で亡くなったとされるマカリオスの存命中に、彼について書かれた唯一の記録ということになる。

次いで古いのは、著者不明の書『エジプトの修道者列伝』（HM）の記述である。ギリシア語を著作原語として4世紀末に成立したとされる本書には、410年に没したアクイレアのルフィヌスによるとされるラテン語訳も存在するが、ギリシア語版とラテン語版が往々にして大きく食い違うという本文伝承上の問題が存在する。

ここで取り上げたいのは、マカリオスがキリスト教の或る異端者と死者の復活をめぐる論争を行ない、行きがかり上死者をよみがえらせたというエピソードである。この話を伝えているのは、HMのラテン語版、『ラウソスに献じるキリスト者列伝』（HL；この文書については後述）のギリシア語写本の一部⁽⁷⁾⁽⁸⁾、そして、HLと密接に関係すると思われる、マカリオスにかかわるエピソードを

集めたコプト語典礼用抜粋集 (CompL)⁽⁹⁾ である。また、同じエピソードは、カ
ッシアヌスがラテン語で著した『講話』*Conlationes* でも語られている⁽¹⁰⁾。そして
『マカリオス伝』のシリア語版は CompL からこのエピソードを取り入れたら
しい。

これら諸文書の先後関係については、次の箇所が問題を解く鍵を提供してい
る。すなわちラテン語の二つの文書によれば、議論だけでは埒が明かないとな
った時に、現実には死者が復活するかどうかで決着を図ろうと言い出したのは、
マカリオス自身であるとされる。

⁽¹¹⁾
・ HM

<訳> しかし、兄弟たちの信仰が危機にさらされているのを聖人 (マカリオス) は
見てとったので、(こう) 言いました、「私たちが、聞いている者たちの破滅のために
言葉で争うのは、必要なことでしょうか。主にあって私たちに先立った兄弟たちの墓
に行きましょう。そして私たちのうちのどちらに、死者を墓からよみがえらせること
を主が得させてくださるか、皆は知るがよいでしょう、なぜなら彼の信仰こそが神の
認めるものとなるのですから」。

⁽¹²⁾
・ カッシアヌス『講話』

<訳> 彼 (マカリオス) を異端者が弁証法的技巧で攻撃し、無知な彼をアリストテ
レスの茨へと拉し去ろうとしたので、幸いなるマカリオスは使徒的な簡潔さで彼の
多弁をしまいにさせて言いました、「『神の国は言葉でなく力にあります』 (I コリント
4・20)。ですから、墓へ行って、死者のうち (私たちがそこで) 最初に見つけた
者について、主の名を呼びましょう。そして、聖書に記されてあるとおり、業によ
って私たちの信仰を示しましょう。正しい信仰のこの上なく明白な実例が、信仰の証言
(たる業) によって明らかにされるために、また、私たちがはっきりした真理を、言
葉による無益な論議によってではなく、奇跡の力と、誤ることのありえない裁きとに
よって、確認するために」。

これに対して、HL のギリシア語写本の一部及び CompL によれば、同じことを
言い出したのは異端者の方だとなっている。

⁽¹³⁾
・ HL のギリシア語写本の一部

<訳> これ (マカリオスの命によって主教によって読み上げられた信条) を聞いた
彼 (異端者) は、むしろ自らの父たる悪魔の誤謬に導かれるままに言いました、「言

業による信仰など、私に持ち出さないでくれ。むしろ、もしあなたが本当の信仰を持っているのなら、墓へ行こうじゃないか。そして、そこに横たわっている死者の一人をよみがえらせてくれ。そうすれば、あなたの信仰が本物であなたの考えが正しいということを、私に納得させられるだろう。それができないのなら私が、体のない魂をよみから上らせよう」。

⁽¹⁴⁾
• CompL

<訳> すると、かの不敬な誤れる者は彼らに言いました、「私は、言葉による信仰は、あなたがたから求めているものじゃない。むしろ、もしあなたがたの信仰が正しいのなら、それが業と力によって示されんことを。だから、墓へ行こうじゃないか。そしてそこで、私のために死者を一人よみがえらせてくれ。もしそうしたなら、私たちはあなたがたの信仰が正しいことを知るだろう。そうでなければ私が、体のない魂をあなたがたのために呼び寄せてみせよう」。

そこで問題はどちらのエピソードの形の方が古いかだが、最古の聖人伝である『アントニオス伝』以来、キリスト教の聖人の描写では、奇跡を実現する主体は神であり、聖人はその媒介者と位置づけられていると言える。⁽¹⁵⁾ところが聖書によれば、人間の側から奇跡を願い、それによって神を試みることは、この上ない不遜な行ないだとされる。⁽¹⁶⁾この点を顧慮するなら、上述の違いは、HLのギリシア語写本の一部及び CompL の側が、エピソードがより聖書的になるよう、不遜な行ないを異端者の側に付け替えたため生じたと解することができ、よってラテン語の二文書が伝えるエピソードの形の方が古いと考えられる。HLのギリシア語写本の一部及び CompL が伝えるエピソードが、いわゆる「マカリオス信条」を含むなど、ラテン語の二文書が伝えるエピソードに比して膨れ上がっていることも、同様の結論を示唆する。⁽¹⁷⁾

次に、HLのギリシア語写本の一部と CompL との関係については、次の箇所の比較からみて前者の方が古いと考えられる。

⁽¹⁸⁾
• HLのギリシア語写本の一部

<訳> 主教は彼に言った、「では私たちはどうしましょうか」。聖マカリオスは言った、「ここでは祈りと、救い主の助けとが必要です。他のいかなることによってもこれに打ち勝つことはできませんから」。

⁽¹⁹⁾
• CompL

<訳> そこで主教は言った、「では私たちはどうしましょうか、我が父よ。私たちは心の底からの大いなる祈りが必要です。言葉では無力でしょうから」。

後者がすべてを主教のセリフとしているのは明らかにおかしい。HLにある「聖マカリオスは言った」という言葉が何らかの事情で欠落し、その欠落を含む本文が CompL の基となったと考えられる。また、この比較からも CompL と HL の間の密接な関連は明白であり、前者は後者を編集的に翻訳したものである可能性が高い。⁽²⁰⁾

次に『ラウソスに献じるキリスト者列伝』(HL) は、ルフィヌスに近い人物であるパラディオスが420年に著したが、この著作もまた本文伝承上の複雑な問題をはらんでおり、最もよく用いられる C. Butler の校訂版は、決定版と言うには未だほど遠い。その Butler は校訂の際、シリア語版とラテン語版の伝承(特に両者の一致)を重視して HL のギリシア語本文を定めていったが、一昨年2003年には、HL のラテン語版の新たな校訂版が刊行された。⁽²¹⁾ 問題を見直す気運が出てきているのかもしれない。

『マカリオス伝』に流れ込んだエピソードのうち HL に由来するものとしては、或る男の横恋慕が原因で魔術によって雌馬に変身させられた人妻の話や、金銭愛のゆえに罪に陥った上述の弟子の話があるが、このうち前者は、HL から CompL 経由で、つまり直接的にではなく間接的に、『マカリオス伝』に取り込まれている。また、これら二つの話はいずれも『マカリオス伝』シリア語版の段階で取り込まれており、その前段階のボハイル方言版にはない。⁽²²⁾

『マカリオス伝』への HL の最大の影響は、むしろ次の箇所に看取すべきかもしれない。

・『マカリオス伝』ボハイル方言版 第44章：エピローグ⁽²³⁾

<訳> 事実、我々はわざと、神が彼(マカリオス)によって為された数多くのしるし・奇跡或いはまた癒しのうちの多くを(語らずに)無視した。言葉が多すぎないようにするためである。ひょっとすると、驚嘆すべき彼の業の偉大さのあまり人々は、真実は(言えば、これは)嘘なのだと思うかもしれない。

『マカリオス伝』(より正確には、テキストが完備した形で再構成できる最古の版であるボハイル方言版)の著作意図が述べられている「エピローグ」中の

この一節は、HL の次の一節を想起させると言えないだろうか。

・ HL 第17章⁽²⁴⁾

<訳> 名にし負う男たちである二人のマカリオスに関する事は、数多くあり（話が）大きく信じがたいので、嘘つきとのそしりを受けないかと思って、話すにも書くにもためらってしまいます。なぜなら、主は「嘘を語る者を皆滅ぼされる」と、聖霊は言明しているからです。そこで、私は嘘はついていませんので、大変信心深い方よ、不信仰になられませんか。

『マカリオス伝』が、全体が言わば修辭的うどん粉で引き伸ばされることで成立した著作であることは疑いなく、その出発点が、彼の為した業の偉大さゆえに、書けば嘘と思われるかもしれないとする HL の上述の言葉だった可能性は否定できない。

『マカリオス伝』の中には明らかに全くの創作も含まれていることに、ここで触れておきたい。それが特に明白なのはマカリオスの前半生に関する部分である。すなわち、彼の両親はアブラハムとサラのように故郷を離れ、移り住んだ先でマカリオスが生まれた、彼は輔祭になる前に、両親の圧力で結婚させられた——東方教会では司祭までは妻帯可能で、そして妻帯する場合、輔祭になる前に結婚しなければならないからだが——、しかし妻はほどなくして死んでマカリオスは純潔を保ち、その後両親も死に、等々。聖書的モチーフ（アブラハムの離郷）や修道理想に基づくモチーフ（結婚の忌避）をご都合主義的に織り込んだこの話の中に史実を見いだすのは困難で、著者による創作と考えるべきだろう。⁽²⁵⁾

次に、5世紀末に編纂されたとされる『金言』には、マカリオスに帰せられる金言が40余りあり、中でも第1番は、マカリオスがスケーティスの砂漠での修道生活を始めるに至った経緯を語る半ば伝記的な内容で、最も有名な金言の一つである。この第1番と第2番が、特に前者については出典を明示する形で、『マカリオス伝』に（遅くともボハイル方言版の段階から）取り入れられている。

しかし私見によれば、『金言』のマカリオス第1番は文学的創作である可能性が高い。第1の論拠として、HL の第70章には、或る処女の妊娠の張本人という偽りの嫌疑をかけられた読師（ἀναγνώστης）⁽²⁶⁾の話が出てくるが、この話とマカリ

オス第1番とでは、次の3点が共通している。

- (1) 処女が誘惑され妊娠に至ったこと。
- (2) 偽りの嫌疑をかけられたのが聖職者であること(『金言』マカリオス第1番によれば、当の嫌疑をかけられた時、マカリオスは既に聖職に叙品されていた)。
- (3) 出産に臨んだ女が数日の間産めずに苦しみ、ついに真実を告白するに至ったこと。

既述のように、話書き記された年代はHLの方が早い。マカリオス第1番がHLの話をもとに作られた可能性は、少なくとも年代的には十分考えられる。

第2に、『金言』マカリオス第1番の話はHLの記述と矛盾する。すなわち同金言によれば、マカリオスはスケーティスに行く前には一人で隠遁者生活を送っていたとされるが、HLは、彼の精進ぶりを次のように記しているのである。

・HL 第17章

<訳> まずエジプト人(マカリオス)のことをお話ししましょう。彼はまる九十年生き、そのうち砂漠では六十年間過ごしました。三十歳の若きで(砂漠に)上ったのです。そして非常な(霊の)識別力を受けるに至り、「子ども長老」と呼ばれました。ということで、彼は(人より)早く進歩し、四十歳になった時、もろもろの霊に対抗するために、癒しと預言との賜物を受けました。また司祭職をも受けるに至りました。

この記述を素直に読めば、マカリオスは30歳から始めた修道生活を、「子ども長老」というあだ名をもらうなど、他の修道者たちが周囲にいる環境の中で営んだと理解できる。他方、確かにマカリオスのスケーティスでの生活は孤独な隠遁生活だったろう。とすると、HLによれば、マカリオスの「子ども長老」時代の修道生活は彼がスケーティスに行く以前のことであるはずである。『金言』マカリオス第1番が描くイメージとの食い違いはかくて明白だろう。そして、下エジプトの砂漠の修道者たちに関するHLの記述については、著者のパラディオス自身彼らの多くに会ったことから見て、これを信頼してよい。よって『金言』のマカリオス第1番は文学的創作である可能性が高い。その金言を基にさらに文飾を施して当のエピソードを綴っている『マカリオス伝』(第16章)については、もとよりその史実性など云々すべくもない。

以上見てきたいいくつかの例から、『マカリオス伝』が、マカリオスについて伝える諸文書の言わば終着点であること、その史的人物像に関する貴重な資料と言うよりむしろ、彼について後世が作り上げたイメージを知る手がかりを成していることは、明白だろう。

『マカリオス伝』の資料調べを終える前に、『マカリオス伝』が受けた文学的影響について一言しておきたい。最も顕著なのは『アントニオス伝』からの影響である。最古の聖人伝として言わば祖型たる『アントニオス伝』の影が、後代の聖人伝のうちに見え隠れするのは不思議でなく、内容上の類似の列挙は他の聖人伝についても行なわれている。⁽²⁷⁾ただ『マカリオス伝』の場合、少なくとも1箇所『アントニオス伝』からの逐語的借用が認められることは、ここで記すに値しよう。すなわち、(両者の方言上の相違を考慮に入れると)『マカリオス伝』ボハイル方言版の第2章の冒頭

pimaste pethnanef de ndiabolos mpefsfai erof efnau...⁽²⁸⁾

<訳> しかし、善を憎む者、すなわち悪魔は、(マカリオスの両親が清く正しい生活を営んでいるのを) 見るのに堪えられず……

は、『アントニオス伝』サヒド方言版の第5章の冒頭とほぼ逐語的に対応する。

pdiabolos de pmeste petnanouf auð pephthonêros mpefešfei erof efnau...⁽²⁹⁾

<訳> しかし悪魔、すなわち善を憎む者であって妬む者は、(アントニオスのうちにこれほどの熱意があるのを) 見るのに堪えられず……

『アントニオス伝』の影響の大きさを物語る例と考えられる。

II. 『マカリオス伝』伝承と東方キリスト教文学の歴史

次に、『マカリオス伝』の伝播といわゆる「東方キリスト教圏」(Christian Orient) の諸地域での文学運動とのかかわりを、上掲の系統図に沿って見ていくことにする。

まず、著作原語の問題に触れなければならない。⁽³⁰⁾現存するコプト語著作の著作原語がコプト語かギリシア語かという問題がコプト語文学全般に遍在することは、研究者の間では周知に属する。現存するいかなるコプト語テキストから

もギリシア語の著しい影響が窺われるからであり、そしてその影響は、アレクサンドロス大王の東征以来アラブ人による征服まで約千年間、エジプトの支配階層の言語がギリシア語だったことと、コプト語の文学言語としての成立と関係の深いキリスト教の伝播が、ギリシア語によっていたこととに由来する。例えば、ギリシア語の小辞(δῆ や γὰρ)の使用を以て或るコプト語の著作の著作原語をギリシア語と断定するのは必ずしも正しくない、というほどに、ギリシア語の影響は徹底的だったと考えられているのである。著作原語決定の難しさは『マカリオス伝』の場合も同様で、ギリシア語とサヒド方言のどちらが著作原語か、現状では決定できない。

次に、『マカリオス伝』はサヒド方言版からボハイル方言版へと翻訳された可能性が高いが、この点⁽³²⁾は、ボハイル方言の文学を考える上で興味深い論点にかかわる。すなわち20世紀前半のコプト学の泰斗 L. Th. Lefort は、ボハイル方言文学は一般に翻訳文学であり、しかもそれはギリシア語からではなくサヒド方言からの翻訳だと主張したが、⁽³³⁾『マカリオス伝』は、サヒド方言からボハイル方言への翻訳の例という意味で、そしてその限りで、Lefort の主張を裏書きすると考えられるのである。

但し、Lefort の論証方法には問題がある。すなわち、ボハイル方言の著作では、目的節で使用される動詞の形が、ボハイル方言でふつう用いられる「接続形」でなく、サヒド方言において目的節でふつう用いられる形である「第2未来・第3未来」であることがしばしばあり(『マカリオス伝』にもよく見られる現象である)、サヒド方言の強い影響を思わせるこのような言語的特徴が、サヒド方言からの翻訳を主張する Lefort の論拠の一つになっているが、この議論⁽³⁴⁾は妥当でない。

理由を述べると、『金言』のボハイル方言版(APBoh)では、いわゆる「第2時制」の形がボハイル方言本来の形(3人称単数の形で示せば、第2現在:af-, 第2未来:afna-)でなくサヒド方言の形(同様に、第2現在:ef-, 第2未来:efna-)になっている。⁽³⁵⁾『マカリオス伝』にも見られるこの現象もまた、Lefort の議論の伝で行けば、サヒド方言からの翻訳の論拠の一つたりえようが、この『金言』ボハイル方言版自体は、サヒド方言からでなくギリシア語からの翻訳である可能性が高いのである。幸便にギリシア語版・サヒド方言版・ボハイル方言版の三者とも現存する『金言』マカリオス第1番を例に見ると、

・ AP (ギリシア語版)⁽³⁶⁾

<訳> 人々は彼女(偽ってマカリオスを自分の妊娠の張本人に仕立てた娘)に言いました、「これはどういうことなのか」。彼女は言いました、「私は、自分がかの隠遁者を中傷し、偽って訴えたことを知っています。そして、この方にかかわりがあるのではなく(οὐτος οὐκ ἔχει πρᾶγμα), (かかわりがあるのは) 某という若者です」。

・ AP (サヒド方言版)⁽³⁷⁾

<訳> 人々は彼女に言いました、「これはどういうことなのか」。彼女は言いました、「私にはわかっています、というのも、私は隠遁者を中傷し、彼に対して嘘を言ったからです。そして、彼は私には何もしませんでした (mpefer laau nai), (したのは) 某という若者です」。

・ APBoh (ボハイル方言版)⁽³⁸⁾

<訳> 人々は彼女に言いました、「これはどういうことなのか」。彼女は言いました、「私にはわかっています、というのも、私は隠遁者に乱暴なことをし、彼に対して偽りの中傷をしたからです。このことは彼のことではありません (phai mmon hōb ntaf), 某という若者が私を妊娠させたのです」。

原文で比較するなら、ボハイル方言版の mmon は οὐκ⁽³⁹⁾ の, hōb ntaf は ἔχει πρᾶγμα の, それぞれ字面どおりの訳だと理解できる。これに対して、サヒド方言版の対応箇所は全くの意識であり、そのようなサヒド方言版からの翻訳によってボハイル方言版が成立したとは考えられない。よって、『金言』ボハイル方言版は、サヒド方言を経由せず直接ギリシア語から翻訳されたものである可能性が高い。⁽⁴⁰⁾

したがって、Lefort が指摘したような言語的特徴は、ギリシア語からの翻訳の場合にも観察されるのだから、サヒド方言からの翻訳の痕跡とみなすよりむしろ、当のボハイル方言自体が特定の時代・場所において呈した言語状態・言語段階⁽⁴¹⁾ (の特徴) だと理解するべきだろう。すなわち、現存のボハイル方言文学の大宗は、9 世紀初頭にワーディー・ナトルーンのマカリオス修道院が劫略を受け荒廃した後、その復興の中で成立したが、そのようにして成立したないしは再興されたボハイル方言文学で用いられた言語が、上述の特徴を有するボハイル方言だと言うべきだろう。

ところで、このボハイル方言文学の「再興」は相当に大規模な文学運動だったことが知られているが、⁽⁴²⁾ そのような文学運動の中で『マカリオス伝』は、翻

訳されるべき文書中の上位を占めていたに相違ない。『マカリオス伝』のボハイル方言版は9世紀に成立したと断言して差し支えない。

次に、『マカリオス伝』ボハイル方言版からはシリア語への翻訳が行なわれた。⁽⁴³⁾ コプト語からシリア語への翻訳というケースは、これまであまり語られてこなかったように思われる。そこで、別稿で述べた論拠の一つを、⁽⁴⁴⁾ 写本伝承の系統をどのように確定したかを示す意味も込めて、ここで再度紹介するのは無意味でないだろう。

シリア語版『マカリオス伝』の第58章に次のような表現が出てくる。⁽⁴⁵⁾

<訳> そして彼ら(悪霊ども)は叫んだ、「おおひどい、お前は我々に勝った、我々をまた負かした。おお、時代の悪逆な(シリア語では biš zavneh) 老人め」。

この中で「時代の悪逆な老人め」という表現は、理解不能ではないが少々奇妙な言い回しではある。

同じ箇所はボハイル方言版のほかサヒド方言版にもあり、三者の比較が可能である。そこで次にサヒド方言版を見ると、⁽⁴⁶⁾

<訳> (そして悪霊どもは) 叫んで(言った)、「お前は我々を負かした。おお、悪逆な(kakourkos) 老人め」。

kakourkos とはギリシア語の **κακούργος** のことである。⁽⁴⁷⁾ ここには何の不思議もない。

最後に、ボハイル方言版を見ると、

<訳> (そして悪霊どもは) 叫んで(言った)、「お前は今回も我々を負かした。悪逆な(kakokeros) 老人め」。⁽⁴⁸⁾

使われている kakokeros は、たぶん **κακούργος** の書き損ないだろう。しかし注目すべきことに、この形は kakos+keros (=kairos)、つまり「悪い」+「時」と解釈できる。上述のシリア語版の「時代の悪逆な」という表現はここから、つまりボハイル方言版から来たと考えられる。

この他に、⁽⁴⁹⁾ シリア語版がコプト語版からの直訳であることを窺わせる箇所も一、二あり、それらを勘案した結果、シリア語版はコプト語版からの、より具体的にはボハイル方言版からの訳である可能性が高いと考えられるのである。

ところで、A. Baumstark 及びそれを承けた G. Graf が主張したこれまでの説は、エジプトの聖人たちの伝記のシリア語版はアラビア語からの訳である、⁽⁵⁰⁾というものだった。その論拠は、『ヨアンネス・コロボス伝』のシリア語版の末尾に記された奥書中の、このシリア語版がアラビア語からの翻訳であると明言⁽⁵¹⁾している言葉である。とすると、シリア語への翻訳は、アラビア語からだけでなくコプト語からも行なわれていたことになる。

では、シリア語へのそのような翻訳活動はいつ行なわれたか。こと『マカリオス伝』に関して言えば、そのシリア語版を伝える最古の写本 SyrA は、写本カタログを著した W. Wright はこれを10世紀のものとしており、⁽⁵²⁾Wright によるこの書体学的年代決定は支持できる。⁽⁵³⁾したがって、遅くとも10世紀には『マカリオス伝』シリア語版は成立していただろうが、さらに遡って、9世紀に成立したと考えることも可能なのではないか。というのは、シリア語訳が行なわれた場所であるワーディー・ナトルーンのシリア修道院は9世紀初頭に活動を⁽⁵⁴⁾開始したことが知られているが、『マカリオス伝』など、同地の開山者マカリオスに関する文書はそのシリア修道院によっても早くから必要とされただろうからである。かくて、9・10世紀のワーディー・ナトルーンでは、ボハイル方言文学の再興が大規模に進められたそのわきで、ボハイル方言或いはアラビア語からシリア語への翻訳も進行していたことになる。またこのことは、シリア語文学研究において古写本の保存場所として考えられがちなシリア修道院が、シリア語文学伝承の上で積極的な役割（この場合で言えば、エジプトの聖人伝文学のシリア語化）を担っていたことをも示唆する。

次に、シリア語版からはアラビア語への翻訳が行なわれた。表1から明らかに、アラビア語版は二つのグループに分かれる。本文の長い ArabY と、ArabX との比較でいくつかの章を欠くグループである ArabX がそれぞれである。⁽⁵⁵⁾長さから見れば、ArabY はシリア語版と長さが同じであり、よって ArabX よりも古いと結論できそうだが、話はそう簡単ではない。シリア語版及び ArabX にあって ArabY にないエピソードも存在するからである。ArabX と ArabY の関係の明確化は今後の課題である。

この ArabX は、東方キリスト教の諸派の中のいわゆる皇帝派 (melchite)、すなわちカルケドン派の教会の文学伝承との関係が深いようである。ArabX の成立自体が皇帝派によるものだと言えるかどうかは不明だが、ともあれ、

別稿で論じたように ArabX の成立地はエジプト以東のようであり、そしてこのグループに属する四つの写本のうち三つは明らかに皇帝派の文学伝承に属する写本である。⁽⁵⁶⁾⁽⁵⁷⁾

アラビア語版の成立年代は、後述するギリシア語版の年代との関係から見て、遅くとも11世紀、早ければ10世紀だろうが、その10世紀にはコプト語は既に死語になりつつあり、同じ時代に、サウィールス・イブン・アルムカッファのようなエジプトのキリスト教著作家が、人々の理解のためアラビア語での著作を始めている。⁽⁵⁸⁾したがって、コプト語から直接アラビア語へ訳されても不思議はないが、なぜシリア語からの翻訳なのか。たぶん、同じシリア修道院で、シリア語訳だけでなくアラビア語訳も行なわれたのではないかと⁽⁵⁹⁾。無論、純言語的観点からすれば、セム語からセム語に訳すほうが非セム語からセム語に訳すよりも遙かに容易である。9世紀に多くの医学書をギリシア語からアラビア語に翻訳したフナイン・イブン・イスハークが翻訳の中間段階としてシリア語訳を用いたのは有名だが、類似のことが一時期のワーディー・ナトルーンでも行なわれたのではなかろうか。

次に、『マカリオス伝』のギリシア語版は、アラビア語版、より正確には ArabX に由来すると考えられる。例えば表1を見ると、ArabX とギリシア語版とでは、章の欠落の仕方が顕著に一致しており、この一致は偶然では説明しがたい。ArabX とギリシア語版の間には何らかの関係があったに相違ない。ところが、上述のようにボハイル方言版→シリア語版→アラビア語版という順序はかなり明確なので、ギリシア語版は、ボハイル方言版より古いのでなければ、アラビア語版の後に来ると考えざるをえない。そして、現存のギリシア語版がボハイル方言版より古いとは考えられないので、かくてギリシア語版は、アラビア語版、より正確には ArabX に、由来するという結論になるのである。⁽⁶⁰⁾

ギリシア語版の成立年代については terminus ante quem がわかっている。⁽⁶¹⁾それによると、『マカリオス伝』の話の抜粋が二つ、アンティオキアの主教として11世紀末に活動したオクセイアのヨアンネスが編纂した“Ekloge Kephalaion”という抜粋集に載っているとのことである。よって『マカリオス伝』ギリシア語版は11世紀末ごろまでには成立していたと考えられる。ギリシア語版の成立地については、正教の修道院が散在したパレスチナである可能性は大いにあるが、くだんの抜粋集の存在からすると、アンティオキア及びその周辺とい

う可能性も否定できない。

ところで、『マカリオス伝』アラビア語版とギリシア語版は、内容的に一致しこそすれ、文言のレベルでは明らかに全く異なる⁽⁶²⁾。つまり、ギリシア語版はアラビア語版を基にした「書き直し」であると言えるが、ビザンツ文学で書き直しと言えば、10世紀に編纂されたシメオン・メタフラステースのメノロギオンが想起される。このメノロギオンとは、それぞれの日に因んだ聖人の伝記の1年分の集成であり、その際シメオンは、当時の文体的趣味に即して、多くの伝記について書き直し（メタフラスシス）を行なったことが知られている。そして、同様のことはシメオンだけでなく他の人々も行なったらしい。とすると、『マカリオス伝』は、そのような書き直し或いはメタフラスシスというビザンツ文学上の運動の中で、単にギリシア語からギリシア語への書き直しだけでなく、別の言語（この場合で言えばアラビア語）から、ギリシア語への書き直しも行なわれたことを示す例だと言えるのではないだろうか。少なくとも『マカリオス伝』の場合、このような位置づけは年代的に可能である。アラビア語からギリシア語への翻訳・移行自体は、これまでも知られていなかったわけではないが⁽⁶³⁾、果たしてそのうちの程度が、ビザンツ文学上の運動との関連で位置づけられるのか。これは今後の研究課題の一つだろう。

『マカリオス伝』の伝播はアンティオキア止まりではなく、アトス山にも及んだと思われる。管見の限りでは、アトス山の修道院の写本で『マカリオス伝』を含むものは見つかっていないが、ギリシア語版からグルジア語及び中世教会スラブ語への翻訳が行なわれ、写本が各々トビリシとサンクト・ペテルブルクとに所蔵されている。これらの伝承の交点として最も可能性が高いのはアトス山である⁽⁶⁴⁾。また、ギリシア語版の二つの写本（系統図上の GrA と GrB）はいずれもメテオラの修道院の所蔵物である（ないしは、だった）ことがわかっており、『マカリオス伝』がメテオラに至る経路としてもアトス山経由が一番考えやすい。他方でアラビア語版からは、年代は不明だがエチオピア語版への翻訳が行なわれ、エチオピアの或る修道院の写本に保存されている。かくて、北はアトス山及びその北のスラブ世界まで、南はエチオピアまで、『マカリオス伝』伝承は届いたと言える。

III. お わ り に——「翻訳の歴史」に向かって——

以上の議論を、まず後半部分に即してまとめると、我々は、『マカリオス伝』の伝承の一齣一齣で、ボハイル方言文学の再興、それに隣接するシリア語文学の翻訳活動、アラビア語版の一部 (ArabX) の皇帝派 (melkite) のアラビア語文学への取り込み、そして、アラビア語からギリシア語への書き直し (メタフラシス)、といった出来事を観察できた。もとより、一文書を基にした観察には限りがあるのであり、かなり幸運なケースだったと言える『マカリオス伝』もまた、その例外ではない。

「翻訳の歴史」の研究は、もちろん、オリエント学が始まって以来行なわれてきていると言って過言ではあるまい。文学伝承に限っても、伝承史の複雑さで有名な『カリラとディムナ』や『バルラムとヨアサフ』についてオリエント学者たちがあれこれ論じたことは旧聞に属する。⁽⁶⁵⁾

ところで、西欧中世のいわゆる12世紀ルネサンスとの関連で、例えば哲学・科学文献のギリシア語からアラビア語への (シリア語経由の、或いは直接の) 翻訳は、これまで比較的良好に研究されてきたかもしれない。しかしそれは、事物の行き交う場であるオリエントにおける唯一の流れでは決してなく、本稿で見たように、その他さまざまな方向で事物は動いていった。⁽⁶⁶⁾

そして、このような視角から見た場合にいわゆる「東方キリスト教圏」 (Christian Orient) が有する意義を、ここでは強調したい。というのは、確かにキリスト教文化という枠が存在するが、その枠がもたらす一体性のゆえに、域内の交流はむしろ自由闊達だったと想像されるのであり、かくて東方キリスト教圏は、異文化交渉をその一体性と多様性において観察する格好の場だと考えられるからである。また、上述の『カリラとディムナ』や『バルラムとヨアサフ』など非キリスト教的文化に由来する文書でも、それが西方へと伝承される過程では、地理的に見て東方キリスト教圏を通過するほかなかったのであり、それが果たして単なるフィルターだったのか、それとも対象の変成をもたらしたかは、当の文書に興味を抱く者にとって関心事でないはずがない。

20世紀の東方キリスト教研究における記念碑的労作と言うべき、Baumstarkのシリア語文学史であれ Graf のキリスト教アラビア語文学史であれ、こと翻訳に関しては、それらは個々の作品の写本リストの提示の域を超えていない。

「翻訳の歴史」にこそ、未開拓の領域がなお広大に存在するのではないだろうか。本稿は一例の提示にすぎないが、今後事例研究が積み上がれば、現在では机上の想像にとどまる「翻訳の歴史」が具体的な形姿をとるに至ることも不可能ではないだろう。

そして本稿の前半に話をつなげるなら、以上述べた「翻訳の歴史」の解明は、マカリオスやアントニオスといった初期の修道者たちの史的人物像を究明する上で前梯を成す。本稿で述べたように、それらの人物について伝える文献は複雑な伝承過程を有するからである。このような行き方は迂遠に見えるだろうし、またこれが唯一の方途だと言うつもりは筆者にはないが、しかし徹底的な究明のためにはこのような作業は不可欠である。そしてその過程で、初期の修道者たちの実際の人物像と、後世が作り上げた彼らのイメージとが弁別されていき（もちろん、前者だけでなく後者も、修道制の歴史を考える上で独自の意義を有する）、かくて歴史と文学伝承との関係の十全な解明が可能になるのだろう。今後このような方向での研究が進むことを、また筆者自身それを進めるを得ることを、念願しつつ本稿を閉じることとしたい。

* 本稿は、第46回日本オリエント学会大会（2004年10月、於東京外国語大学）における研究発表「東方キリスト教文学伝承の多様性—『エジプト人マカリオス伝』を例に」に加筆を施したものである。

本稿で使用する略号は以下のとおり。

AMÉLINEAU=E. AMÉLINEAU, *Histoire des monastères de la Basse-Egypte* (Annales du Musée Guimet, 25), Paris, 1894.

AP=『師父たちの金言』（『金言』）ギリシア語版（本文を参照）

APBoh=『金言』ボハイル方言版。校訂版はAMÉLINEAU, 203-234.

BEDJAN=P. BEDJAN, *Acta Martyrum et Sanctorum Syriace*, vol. 5, Paris, 1895 (repr. Hildesheim, 1968).

BNF=Bibliothèque nationale de France

BUTLER=C. BUTLER, *The Lausiack History of Palladius*, vol. 2, Cambridge, 1904 (repr. Hildesheim, 1967).

CHAÎNE=M. CHAÎNE, “La double recension de l’Histoire Lausiacke dans la version copte”, *ROC* 25 (1925-1926), 232-275.

CompL=Compilation lausiacke（戸田による命名；本稿の日本語文では「コプト語典礼用抜粋集」とした）。校訂版はCHAÎNE, 239-259. 但し誤植が多い（ここでは詳細は略）。

HL=『ラウソスに献じるキリスト者列伝』Historia Lausiaca

HM=『エジプトの修道者列伝』 *Historia monachorum in Aegypto*
 LEFORT=L. Th. LEFORT, “Littérature bohairique”, *Le Muséon* 44 (1931), 115-135.
 PG=Patrologiae cursus completus. Series graeca.
 PTS=Patristische Texte und Studien
 ROC=*Revue de l'Orient chrétien*
 SC=Sources chrétiennes
 VertM=Vertus de Macaire. 校訂版は AMÉLINEAU, 118-202, 邦訳（重訳）は稗田操子
 （訳）『大聖マカリオスの言行録——われらの師父・義人マカリオスの聖徳を偲ん
 で——』, 中央出版社, 1985年。
 拙稿 “Etat”=TODA Satoshi, “La Vie de S. Macaire l’Egyptien. Etat de la question”,
Analecta Bollandiana 118 (2000), 267-290.
 拙稿「報告」=戸田聡『『エジプト人マカリオス伝』研究——経過報告——』, 『エイコー
 ン——東方キリスト教研究——』 27 (2003) 68-81頁。

注

- (1) 以下、本稿中の『マカリオス伝』からの訳出は、筆者が準備している新たな校訂版によるが、参照の便を図るため、旧校訂版 (AMÉLINEAU 及び BEDJAN) の箇所を表示する。
- (2) 系統図上、仮説的な項はイタリックによって示した。*OrigSah*, *OrigBoh* 等々は、各言語の版のオリジナルを、また Sah, BohA, SyrB, ArabC, GrA 等々は、それぞれコプト語サヒド方言、同ボハイル方言、シリア語、アラビア語、ギリシア語の『マカリオス伝』を伝える写本を意味する。本稿では写本間の本文の異同といった点には立ち入らないので、個々の写本の紹介は割愛するが、これについては拙稿「報告」, 69-71頁を参照。但し、同稿での ArabC, D, E, F, G, H, I は本稿での ArabE, F, G, H, I, K, L に当たり、そして本稿で言う ArabC 及びDは、拙稿 “Etat”, p. 274 で紹介した Paris, BNF, Ar. 258 及び257を、また, SyrE 及びFは、同 p. 271 で紹介した Cambridge, Add. 2016 及び Paris, BNF, Syr. 236 を、それぞれ指す。
- (3) 拙稿「報告」, 69及び72-77頁を参照。なお、ボハイル方言版→シリア語版→アラビア語版、及びアラビア語版→ギリシア語版という伝承過程のそれぞれについては、新たに拙稿 “Syriac translation in Egypt. The case of the *Life of Saint Macarius the Egyptian*” (Orientalia に近く公刊の予定), 及び “Position of Arabic in the literatures of the Christian Orient. The case of the *Life of Saint Macarius the Egyptian*” (現在 Orientalia Christiana Periodica にて審査中) において詳論を予定している。
- (4) J. LABOURT (ed.), *Saint Jérôme. Lettres*, vol. 1, Paris, 1949, 148-149.
- (5) 当時複数の人がマカリオスという名だったことはよく知られている。BUTLER, 193-194を参照。中でも、同じく修道者だった都会人 (=アレクサンドリア人) マカリオスは、4世紀にはエジプト人マカリオスに劣らず有名で、A. GUILLAUMONT,

- “Le problème des deux Macaire dans les *Apophthegmata Patrum*,” *Irénikon* 48 (1975), 41-59 によれば、『金言』でエジプト人マカリオスに帰せられている金言のうち、いくつかは都会人に帰せられるべきものとされる。
- (6) HL (BUTLER, 44) によれば、ヨアンネスという名の弟子が、マカリオスの忠告を無視して金銭愛に固執し、その結果マカリオスの死後に象皮病にかかって死ぬ、となっている。『マカリオス伝』シリア語版によれば、ヨアンネスという同名の弟子が、マカリオスが建てた病人収容施設の管理を任されたが、金銭愛から金をごまかし、マカリオスに指摘されたが改めず、HLにあるのと同様の死に方で死んだという。HLには、エジプト人とは別人と考えられるマカリオスが、病人の収容施設の長だったという話があり (HL 第 6 章, BUTLER, 22-24), それが『マカリオス伝』で金銭愛の弟子の話と融合したと考えられる。
- (7) E. SCHULZ-FLÜGEL, *Historia monachorum sive de vita sanctorum patrum* (PTS, 34), Berlin/New York, 1990, 367-368. 同じ話はギリシア語版にはない。
- (8) E. PREUSCHEN, *Palladius und Rufinus. Ein Beitrag zur Quellenkunde des ältesten Mönchtums*, Giessen, 1897, 124-130. BUTLER, 46-47 はこのエピソードを校訂本文から退けているが、マカリオスが死者をよみがえらせたという噂が広まっていたという記述自体は、BUTLER の校訂本文にもある。当の出来事が、遅くとも 5 世紀初頭、早ければマカリオスの存命中に人口に膾炙していた可能性は否定できない。
- (9) CHAÎNE, 245-255.
- (10) E. PICHÉRY (transl.), *Jean Cassien. Conférences VIII-XVII* (SC, 54), Paris, 1958, 212-214.
- (11) SCHULZ-FLÜGEL (註 7 で引用), p. 368 l. 4-7.
- (12) PICHÉRY (註 10 で引用), p. 213 l. 7-18.
- (13) PREUSCHEN (註 8 で引用), p. 127 l. 16-21.
- (14) CHAÎNE, p. 249 l. 28-p. 250 l. 5.
- (15) A.-J. FESTUGIÈRE, “Sur une nouvelle édition du «De vita pythagorica» de Jamblique”, *Revue des études grecques* 50 (1937), 491-492 は、『ピュタゴラス伝』など異教哲学者の伝記との比較で『アントニオス伝』の特徴として、同伝記によればアントニオスは奇跡を行なった際つねに神に栄光を帰している、という点を強調している。
- (16) 旧約聖書の『申命記』6 章 16 節、及びイエス・キリストによるその言葉の引用 (『マタイによる福音書』4 章 7 節並行)。
- (17) 「マカリオス信条」については J. N. D. KELLY, *Early Christian Creeds*, London, 1972³, 190-191 を参照。なお、ラテン語の 2 文書の間の先後関係については、マカリオスと対峙する異端者が、HM のラテン語版では「ヒエラカス派」、カッシアヌスの『講話』では「エウノミオス派」と異なっており、HL のギリシア語写本の所伝との一致から見て、もともとのエピソードでは異端者は「ヒエラカス派」だったと思われる。よって、『講話』よりも、HM のラテン語版のエピソードの形の方が古いと考えられる。

- (18) PREUSCHEN (註 8 で引用) , p. 126 l. 5-7.
- (19) CHAÎNE, p. 248 l. 9-11.
- (20) CompL と『マカリオス伝』シリア語版の先後関係についてここで一言しておく
と、上述のように CompL のエピソードで朗読されている「マカリオス信条」の代わ
りに、『マカリオス伝』シリア語版ではニカイア・コンスタンティノーブル信条が朗読
されている。『マカリオス伝』シリア語版が、CompL 中の風変わりな信条を最も有名
な信条に置き換えた可能性が高い。
- (21) A. WELLHAUSEN, *Die lateinische Übersetzung der Historia Lausiaca des Palladius*
(PTS, 51), Berlin/New York, 2003.
- (22) 但し、ボハイル方言版を伝える写本の 1 つ (Vat. Copt. 第 59 番 = BohA) には、雌
馬に変身させられた人妻の話、及び、悪霊にとりつかれて大食漢となった若者の話が
含まれており、うち後者の話は、『マカリオス伝』を伝える諸言語の写本の中でこの
BohA だけが伝えており、本来の『マカリオス伝』本文にはいかなる意味でも属して
いないと思われる。詳細は省くが、本文の比較からみて、BohA の「著者」は HL のギ
リシア語伝承に接していた可能性が高い。
- (23) AMÉLINEAU, p. 114 l. 3-7.
- (24) BUTLER, p. 43 l. 5-10.
- (25) わずかに、ジジュベールという下エジプトの或る村をマカリオスの生地としてい
ることが、史的に真実である可能性があるが、例えばソクラテスの『教会史』(Socrates
Scholasticus, *Historia ecclesiastica*, IV 23 = G. C. HANSEN (ed.), *Sokrates. Kirchen-
geschichte* (Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte,
Neue Folge, 1), Berlin, 1995, p. 252 l. 14) は、マカリオスは上エジプトの出身だと記
しており、即断はできない。
- (26) BUTLER, 165-167.
- (27) 例えば G. J. M. BARTELINK (ed.), *Callinicos. Vie d'Hypatios* (SC, 177), Paris,
1971, 33-38 を参照。
- (28) AMÉLINEAU, p. 49 l. 10-11.
- (29) G. GARITTE (ed.), *S. Antonii Vitae versio sahidica* (Corpus scriptorum
christianorum orientalium, 117), Parisiis, 1949, p. 7 l. 15-16.
- (30) 著作年代及び著者については拙稿 “Etat”, 267-268 を参照。
- (31) 例えば、コプト語による最初の文学的営みを成したのは聖書の翻訳だが、その際
の翻訳の底本は、新約だけでなく旧約の場合も、ギリシア語の聖書だった。
- (32) 拙稿「報告」, 69 頁。
- (33) LEFORT, 特に p. 134.
- (34) 言語的特徴に関する Lefort の議論については LEFORT, 123-125 を参照。ただ、
Lefort の議論には本文の伝承に関する文献学的な性格のものも含まれるので、ここ
での批判は彼の主張全体を否定するものではない。

- (35) AMÉLINEAU, p. 208 l. 4 (eretener), 及び同 l. 7 (ənouôš=enouôš).
- (36) PG 65, col. 260A.
- (37) M. CHAÎNE, *Le manuscrit de la version copte en dialecte sahidique des "Apophthegmata Patrum"* (Bibliothèque d'études coptes, 6), Le Caire, 1960, p. 23 l. 6-3 ab imo.
- (38) AMÉLINEAU, p. 204 l. 14-p. 205 l. 1.
- (39) なお, phai と οὔτος については, どちらも英語で言えば "this" となるが, ギリシア語の方が人を指しているのに対して, ボハイル方言の方は事柄を指していると解することができ, 意味内容は異なっている。
- (40) コプト語版『金言』が, サヒド方言版であれボハイル方言版であれギリシア語に由来するということ自体については, M. CHAÎNE, "Le texte original des Apophthegmes des Pères", *Mélanges de la Faculté orientale de l'Université Saint-Joseph* 5 (1912), 541-569 (特に564-567) が既に論じているが, しかし Chaîne は, ボハイル方言版がサヒド方言を経由せずに直接ギリシア語から訳されたかどうかは, 明確に論じてはいなかった。
- (41) ボハイル方言の位置づけ方に関するこのような理解は筆者独自のものではない。例えば J. VAN DER VLIET, "History through Inscriptions: Coptic Epigraphy in the Wadi al-Natrun," *Coptica* 3 (2004), 199 を参照。
- (42) H. G. Evelyn WHITE, *The Monasteries of the Wadi 'n Natrûn*, Part I: *New Coptic Texts from the Monastery of Saint Macarius*, New York, 1926 (repr. 1973), xxiv-xxvi を参照。
- (43) なお, 翻訳がワーディー・ナトルーンのシリア修道院において行なわれたことは明白である。拙稿 "Etat", 270 を参照。
- (44) 拙稿「報告」, 75-76頁。
- (45) BEDJAN, p. 248 l. 1-2.
- (46) W. E. CRUM, *Catalogue of the Coptic Manuscripts in the Collection of the John Rylands Library Manchester*, Manchester, 1909, 49.
- (47) コプト語で使われるギリシア語の単語においては γ と κ は互換可能であり, kakourkos という綴りはコプト語では全く正しい。
- (48) AMÉLINEAU, p. 101 l. 1-2. なお, 拙稿「報告」, 75頁で kakokeros という読みは BohB だけが保存していると言いたが, これは誤りで, BohC でもこの語が用いられている。ここで訂正しておきたい。
- (49) この点について詳しくは拙稿 "Syriac translation in Egypt. The case of the *Life of Saint Macarius the Egyptian*" (上記註 3 を参照) で論じている。
- (50) A. BAUMSTARK, *Geschichte der syrischen Literatur*, Bonn, 1922 (repr. Berlin, 1968), 283, 及び G. GRAF, *Geschichte der christlichen arabischen Literatur*, vol. 1: *Die Übersetzungen* (Studi e Testi, 118), Città del Vaticano, 1944, p. 395 n. 2.
- (51) F. NAU, "La version syriaque de l'histoire de Jean le Petit," *ROC* 17 (1912),

- (52) W. WRIGHT, *Catalogue of the Syriac Manuscripts in the British Museum acquired since the Year 1838*, pt. 2, London, 1871, 819.
- (53) 筆者が, W. H. P. HATCH, *An Album of Dated Syriac Manuscripts*, Boston, 1946 を基に行なった検討によれば, SyrA と書体が最も類似しているのは図版の第 CVIII 番と第 CXIV 番だが, 両者はそれぞれ876-877年と927年にワーディー・ナトルーンで書写されている。
- (54) L. VAN ROMPAY et al., “Takritans in the Egyptian Desert: the Monastery of the Syrians in the ninth Century,” *Journal of the Canadian Society for Syriac Studies* 1 (2001), 53.
- (55) 正確には, ArabX に属する写本のうち ArabD は, ArabX のそのまた縮約版を保存していると言える。
- (56) 拙稿「報告」, 73頁。
- (57) ArabB, C, D はマカリオスの命日を, ビザンツ教会の伝承と同じく 1 月19日としている。コプト教会の伝承では 3 月23日が命日であり, コプト語版, シリア語版, ArabY, 及び写本 ArabA はこの日付をとる。
- (58) G. GRAF, *Geschichte der christlichen arabischen Literatur*, vol. 2: Die Schriftsteller bis zur Mitte des 15. Jahrhunderts (Studi e Testi, 133), Città del Vaticano, 1947, 309.
- (59) 上述のアラビア語版の 2 つのグループのうち ArabY の, そのまた支流である ArabY₂ (図 1 を参照) は, 写本の多くがワーディー・ナトルーンの聖マカリオス修道院に所在することから見て, 地理的にエジプトでの伝承のグループだと考えられる。したがって ArabY 自体, エジプトでの伝承のグループである可能性が高い。そこでさらに遡って, アラビア語版自体, エジプトすなわちワーディー・ナトルーンのシリア修道院で, 成立したのと言えるのではないだろうか。
- (60) 以上の点について, 簡略には拙稿「報告」, 76-77頁で, より詳細には拙稿 “Position of Arabic in the literatures of the Christian Orient. The case of the *Life of Saint Macarius the Egyptian*” (上記註 3 を参照) で論じている。
- (61) Ms. E. Skaka の教示による。現在 Oxford 大学で次の学位論文を準備中とのことである。Evangeliki K. Skaka, *The 'Ekloge Kephalaion', Part III, of John Oxiteas. Prolegomena and Critical Text* (DPhil thesis to be submitted to the University of Oxford).
- (62) 拙稿 “Etat” に掲げたそれぞれの版の書き出し (incipit) を参照。
- (63) 例えば P. PEETERS, *Orient et Byzance. Le tréfonds oriental de l'hagiographie byzantine* (Subsidia hagiographica, 26), Bruxelles, 1950, 23 及び185-186を参照。
- (64) ただ, ギリシア語版からグルジア語への翻訳は, パレスチナで行なわれた可能性も否定できない。
- (65) 『カリラとディムナ』の伝承史についてはアラビア語版からの邦訳であるイブヌ・

ル・ムカッファイ／菊池淑子訳『カリーラとディムナ』（東洋文庫331），平凡社，1978，の訳者解説を，『バルラムとヨアサフ』については F. BRUNHOLZL *et al.*, “Barlaam und Joasaph,” in *Lexikon des Mittelalters*, vol. 1: *Aachen bis Bettelordenskirchen*, München, 2002 (paperback edition), 1464-1469 を，それぞれ参照。

- (66) 本稿で触れなかった例として，アルメニア語にかかわるケースが挙げられよう。すなわち，一般にシリア語の著作は多くアルメニア語に翻訳されており，オリジナルのシリア語版が存在しない場合，或いは現存する場合でも，アルメニア語訳はしばしば重要な資料とされる。また，アレクサンドリアのフィロン，初期キリスト作家のエイレナイオスといった人々の著作を知る上でも，さらに聖書の外典・偽典との関連でも，アルメニア語訳が重要となる場合が少なくない。